愛知大学
AICHI UNIVERSITY

明治、大正、昭和に上海にあった日本の大学「東亜同文書院」

高 松 展示会

令和元年10月12日(土)～14日(祝)

10：00～17：00（※14日(祝)は13：00まで）

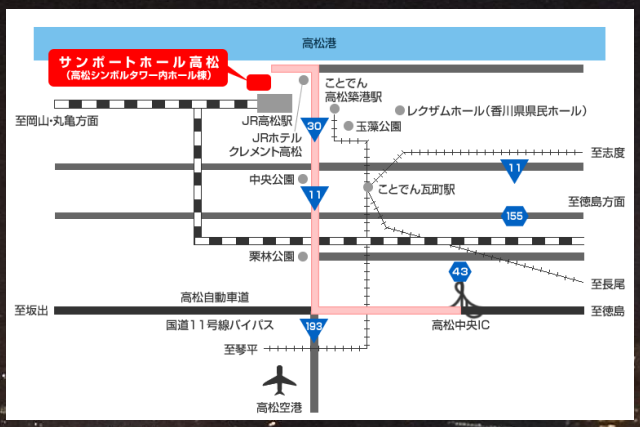
高 松 講演会

令和元年10月13日(日)

13：30～14：00	「東亜同文書院から愛知大学」ビデオ放映と、愛知大学記念館紹介 田辺勝巳（愛知大学豊橋研究支援課長）
14：00～14：45	「東亜同文書院と上海」 石田卓生（愛知大学非常勤講師、愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員）
15：00～16：00	「日本初のビジネススクールとして誕生し、発展した東亜同文書院」 藤田佳久（愛知大学名誉教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長）
16：00～16：20	質疑・応答

サンポートホール高松
1階：市民ギャラリー
コミュニケーションプラザ
〒760-0019　香川県高松市サンポート2番1号
TEL:087-825-5000(代)　FAX:087-825-5040

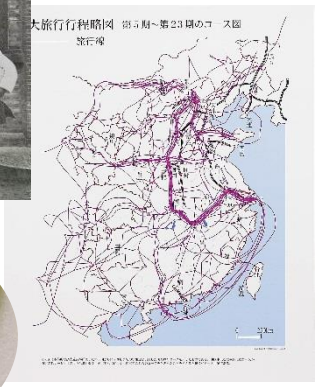
予約不要・入場無料・入退場自由



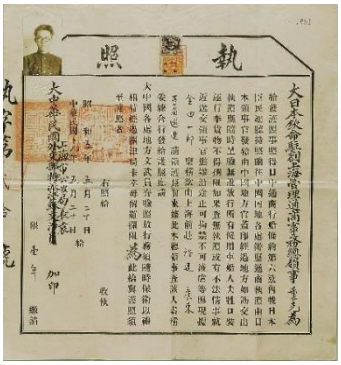
主催：愛知大学東亜同文書院大学記念センター
TEL：0532-47-4139
後援：一般財団法人霞山会、愛知大学同窓会、
公益財団法人愛知大学教育研究支援財団

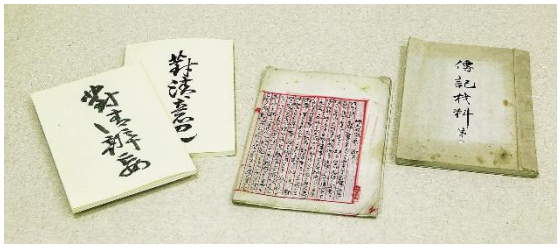
高松展示会での展示物（抜粋）

東亜同文書院大学関連資料

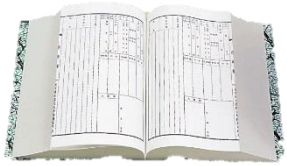


大旅行
東亜同文書院では卒業年度になると3～5人のグループごとに中国大陸各地へ3～5ヵ月におよぶ徒歩中心の調査旅行が行われた。（現在の大学2、3年生）
卒業論文となった「調査報告書」、日記体の記録「大旅行誌」は当時の中国を知る貴重な資料となっている。

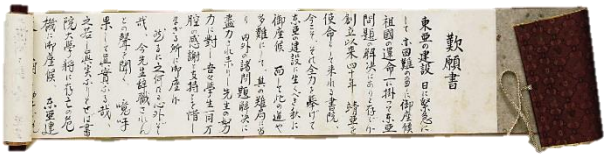




荒尾精が書き記したもの
右から順に『伝記材料第二』、『媾和締盟二対スル鄙見』、『対清意見』（1894年10月、復刻版）、『対清辨妄』（1895年3月、復刻版）。
日清戦争当時の国民世論に反し、広く対局を見て冷静に判断すべきことを訴えた。1896年（明治29年）台湾にて逝去。まだ十分活躍できる38歳であった。



東亜同文書院大学の学籍簿・成績簿
敗戦・閉校にともない、本間らの苦心により接収を免れ、なによりも優先して上海から教職員、学生が持ち帰ったもの。

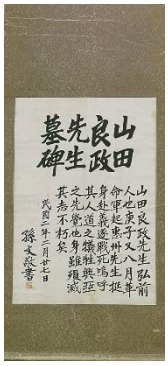


本間喜一への復帰嘆願書
東亜同文書院を辞職して帰国した本間喜一への、学生26名による復帰嘆願書。1942年5月11日。
本間教授を信頼し、慕う学生たちの気持ちがあふれている。これより本間教授は帰院し、学長に就任した。

大学記念館コレクション（孫文関連資料、近衛篤麿・文麿の書など）

孫文と山田純三郎兄弟
山田純三郎は、兄の良政亡き後、東亜同文書院教員を経て、孫文の側近として活躍。

山田良政
（1867～1900年、33歳で没）



「山田良政先生墓碑」孫文書
孫文が公式訪問した折、東京谷中の全生庵に建立された墓碑の銘文を一部書き換えたもの。1913年2月17日。

「山田良政先生之碑」孫文書
青森県弘前市新寺町　貞昌寺
1919年9月29日。

愛知大学記念館常設展示室
「荒尾精、近衛家4代、根津一の書展示室」
よりいづれかを出品。

愛知大学記念館

愛知大学記念館は明治41(1908)年に誕生しました。旧陸軍第15師団司令部の庁舎、そして陸軍教導学校本部に、さらに陸軍予備士官学校本部として使用されました。木造2階建て、寄棟造の桟瓦葺で、両翼屋を背後につき出したコの字型の構造が特徴で、明治日本の近代遺産です。

愛知大学が創立した昭和21(1946)年からは、愛知大学本館として平成8(1996)年までの50年間活用された後、建物の価値が評価され、平成10(1998)年に文化庁により登録有形文化財に指定されました。これを機に「愛知大学記念館」と改められ、博物館相当施設として今に至ります。

愛知大学記念館正面

山田良政・純三郎兄弟、孫部展示室

大学史展示室
「東亜同文書院の45年、愛知大学の70年」

荒尾精、近衛家4代、
根津一の書展示室

愛知大学設立者
名誉学長本間喜一展示室

愛知大学記念館
愛知大学東亜同文書院大学記念センター
〒441-8522
愛知県豊橋市町畑町1-1　TEL　0532-47-4139
「豊橋」駅より豊橋鉄道渥美線で5分「愛知大学前」駅下車

開館時間　10：00～16：00
閉 館 日　月・日、祝、創立記念日
夏期・冬期休暇期間
入場無料　*どなたでもご自由に見学できます。

119年前、中国・上海に誕生した日本初のビジネススクール「東亜同文書院」

日本と中国を繋ぐ、東亜同文会が設立したビジネススクール「東亜同文書院」

愛知大学のルーツ校は、1901（明治34）年に中国・上海に誕生した「東亜同文書院」（1939（昭和14）年に大学へ昇格）。当時の東アジアは欧米列強の圧力が清国へ一層強まる中、日本も危機感を抱えていた。そのような中、弱体化しつつある清国と提携し、東アジアの安定を図ろうとする動きが、それまでの欧米指向中心であった日本の中に新たに芽生えた。

それを具現化したのは、荒尾精が1890（明治23）年、上海に日清間の貿易実務者養成のために開学し、90名を卒業させた日清貿易研究所である。そのあと日清戦争が始まり、日本が勝利すると、清国への賠償金請求が唱えられる中、日本に帰国していた荒尾は反対表明を繰り返し、日清貿易促進のために尽力した。一方、近衛家の筆頭となった近衛篤麿は独学の上、ヨーロッパ留学を経験。2度目のヨーロッパ訪問時にヨーロッパ列強のアジア戦略情報を知ると、東アジア安定化のためには、日清間での教育、文化交流が必要だと痛感する。

そこで1900（明治33）年、近衛は清国の近代化改革をめざす実力者である劉坤一と張之洞の両総督との協議により、南京に「南京同文書院」を開学、日本人入学生24名は、清語・英語・商業・政治などを学び始めた。「南京同文書院」は設立直後、北清事変によって南京の危機が高まったため、1901（明治34）年、上海高昌廟にキャンパスを設置し、「東亜同文書院」に改名した。書院の経営は財団法人東亜同文会が担い、初代院長には根津一が就任して、荒尾精が意図した日清間の本格的な貿易実務者を養成するビジネススクールとしての歩みを始めた。近衛は発展を図るべく新たな全国府県費（給付奨学金）制度による学生募集を行った結果、“知を愛し上海へ”留学した卒業生は5,000名に上った。カリキュラムには、清語・英語の外国語科目や貿易・商業科目が配置され、なかでも中国国内を主なフィールドワーク先とする「大調査旅行」は書院の特筆すべき科目である。これにより述べ700コースに及ぶ調査状況が報告されている。

東亜同文書院大学は、1945（昭和20）年の敗戦後、財団法人東亜同文会の解散とともに幕を閉じた。

なお、最後の学長本間喜一の指示により、中国からの帰還時に、教職員・学生が『学籍簿』『成績簿』をリュックサック等に大切にしまい日本に持ち帰った。5,000名に及ぶすべての『学籍簿』『成績簿』は今も愛知大学で保管されている。

1901

荒尾精（1859～1896年）
1890年、東亜同文書院の前身にあたる日清貿易研究所を上海に開設し、東亜同文書院を構想した。

近衛篤麿（1863～1904年）
近衛文麿の実父。第3代貴族院議長、東亜同文会会長。当初、南京同文書院を設立。のち、上海に東亜同文書院設立。

根津一（1860～1927年）
日清貿易研究所の運営に携わり、近衛篤麿に協力して東亜同文書院設立に尽力。初代・第3代院長。